

『是害房絵』の成立

久留島 元

はじめに

『是害房絵』は、唐土から仏法障碍のため飛来した是害房が比叡山の高僧にさんさんに撃退され、その傷を賀茂川河原の湯治によって癒し本国へ帰る、という内容の絵巻である。『今昔物語集』巻二十第二話、『真言伝』巻五所引の天狗説話と同話関係にあり、直接の影響関係は不明であるが散佚「宇治大納言物語」群に属する説話と推測されている。

稿者は以前、先行説話集の表現と絵巻詞書との比較を通じて、絵巻の詞書は先行説話集にない「平山」や「磯長寺」、「金剛山」など異なる成立基盤に成り立った言説を重層的にとりこんでいると述べた^①。さらに、悪行をなす異形が湯治をへて護法へ転生する「魔仏一如」を基本的な枠組みにもつ絵巻であることを明らかにし、良源信

仰など蒙古襲来後の一四世紀的関心のなかで製作された絵巻であると論じた。その過程で従来成立圏として注目されてきた「磯長寺」の位置づけについても再検討する必要性を感じた。

本稿は前稿の考察と重複する部分もあるが、先行説話集に見られず絵巻で独自に展開する詞書がどのような背景から成立したのかを考察し、『是害房絵』の表現がまさしく一四世紀初頭の絵巻として成立した様相を明らかにする。

今回は直接典拠となる新資料などの指摘には至っておらず、生成論としては不十分なものとなるが、ともすれば単純に結ばれがちだった先行説話集と絵巻との距離を把握し、絵巻成立に至る諸条件を提示することが目的である。

一、絵巻生成の研究史

『是害房絵』諸本に関しては友久武文氏の詳細な分類がある。^②大きく曼殊院本系統と、報恩寺旧藏本系統にわかれるが、報恩寺本系統は所在不明の一本のみである。近世以降は曼殊院本系に謡曲「善界」の詞章などが取りこまれた絵巻が数多く作られた。^③

曼殊院本はもつとも古い完本であり、伝写状況を示す奥書が書かれている。『是害房絵』の本格的研究に先鞭を付けられた梅津次郎氏は、奥書を(一)～(四)の四つに分けて分析された。そして(一)(二)は連続していることから原本にもともとあった本奥書と推定、曼殊院本原本を奥書(一)の「延慶元年初冬下旬之候、於磯長寺塔本草庵写之」にもとづいて延慶元年に磯長寺で成立したものの、奥書(二)「是ハ宇治ノ大納言ノ物語ニ見ヘタリ狂言寄語之誤ニ似タリト云ヘトモ」云々から「宇治大納言物語に取材」した作品、と位置づけられた。また、曼殊院本については奥書(四)「文和三年卯月十二日於下有智庄神光□(以下欠脱)」に基づき、欠脱があり断定はできないとしながらも「文化三年写本」とされたのである。

詞書では、日本の天狗、日羅房が是害房にむかつて日本の霊地をあげる筆頭に「磯長寺」がある。以下、問題となる固有名詞に□、重要箇所傍線を付した。

霊地其数多中ニ、磯長寺者過去七仏法輪処、大乘相應功德地、一度参詣離悪趣、決定往生極楽界ト云ヘリ。依之、上宮太
子、勝地ヲ本朝ニ撰テ、身骨ヲ此砌ニト、メ濟度ヲ末世ニ施シテ、利益ヲ群類ニ及シタマウ。

このことから梅津氏は作者と磯長寺とが「特別な関係」にあると推測され、絵巻成立圏への視座をひらかれたのである。^④

磯長寺は現在も大阪府南河内郡太子町にある叡福寺の別名である。聖徳太子墓(磯長墓)の前に営まれた「墓寺」であり、天王寺とならび太子信仰の拠点となっている。^⑤ちなみに奥書(三)には嘉暦四年に「於石川郡上村積恩寺曼荼羅院西部屋書寫了」とあり、詳細は不明ながら同じ河内国石川郡にあった寺院でも書写されたと見られ、関連が推測される。

さらに牧野和夫氏は、絵巻で独自にあらわれる「平山間是房」が「昔、守屋大臣ノ破法ノ時、其罪ニヒカレテ此道ニ入テ」と語っていることなども含め、聖徳太子信仰をめぐる真言宗、律宗のネットワークが絵巻の生成にも関与したと論じられている。^⑥牧野氏は曼殊院本原本の成立した「延慶元年」にも着目し、

中世律とも連絡する真言僧秀範が、太子御廟参詣の折、老僧から「聖徳太子大事」などの秘事・口伝を授けられた時点もまた、延慶元年の六年後の正和三年(一一三四)であった。この

鎌倉後期の太子御廟における両事実を併せ考えるならば、南河内の叡福寺の周辺（そも／＼のちに楠正成の活躍した地域）に隆盛を見た、太子信仰の土壤に、太子秘事・口伝類が培われる一方で、比良山の天狗を巻き込み展開する天狗道「創始」の話が『是害房絵巻』として開花したのではあるまいか。^⑦

とされる。牧野氏の論は『是害房絵』のみならず延慶本『平家物語』、『比良山古人霊託』、『沙石集』、『太平記』など多くの文献を視野にいたした「文化圏」を想定されているため全体像が把握しづらいが、最新の論考では良源についても次のように言及される。

大権者の「良源」について云えば、叡福寺が天台の有力な一寺院であったこともあり、しばしば『是害房絵巻』に「良源」が登場することに気付く。^⑧

良源は詞書中でもっとも重視されているが、良源信仰と「叡福寺」（磯長寺）との関係はかならずしも自明ではなく、絵巻生成に關する磯長寺（叡福寺）の位置づけは検討の余地がある。以下では磯長寺の史的展開を確認し、絵巻との関連がうかがえるかどうかを確認したい。

二、磯長寺の史的展開

そもそも「磯長墓」に関する言及は、『日本書紀』推古天皇二九

『是害房絵』の成立

年（六二二）二月条に「是月。葬上宮太子於磯長陵」とあるものが早い。また『延喜式』諸陵寮には、

磯長墓 橘豊日天皇之皇太子。名云「聖徳」。在河内国石川郡。兆域東西三町。南北二町。守戸三烟^⑨。

とあり、太子の墓陵が「磯長墓」と呼ばれ意識されていたことがわかる。しかし当時から墓陵に「墓寺」が建っていたかどうかは見解のわかれるところであり、確実な寺院の存在を示す資料は次の『古事談』巻五・二五の記事を待たねばならない。

天喜二年九月廿日、聖徳太子御廟近傍^方、為立石塔引地之間、地中有似宮石。掘出之宮也。長一尺五寸。許、広七寸許。有身蓋。開見之処、御記文也。仍天王寺奏聞事之由。件御記文云。

……此事天王寺別当桓舜僧都、依執柄仰參向彼御廟、掃浴談申云、其所住僧前年為建立私堂、掃除其辺地。其夜夢人來云、此地不可立堂舎。早可停止、此傍地可宜云々。依此夢止初地建立立余所畢。而初処今年掃除之間、所掘石函也。^⑩

天喜二年（一〇五二）、太子墓周辺から「太子御記文」と称する石文が発見されたという。記文の内容は中略に従うが、要するに太子が入滅後四百三十余年後に寺院建立を促した記文の発見を予言していた、というものである。ここから当時「住僧」らが「私堂」を

建立していたこと、「天王寺」がこの地を管理していたこと、記文発見を機に寺塔建立が企図されたこと、などがわかる。これ以後は御廟参詣も盛んになり、建久二年（一一九二）、慈円の『拾玉集』に「上宮太子之古墳」に詣でたことが見え、一二世紀末には重源ら浄土系の勸進僧、続いて叡尊ら西大寺系律衆の太子信仰の拠点になっていく。

小野一之氏は周辺資料を博搜されたうえで、

以上の通り、①一二世紀中ごろに四天王寺などの画策により太子墓の開拓と寺院化が試みられ、②一二世紀末に慈円らによって再び注目され、③一二〇〇年前後に重源らにより仏堂の建立や堂塔造営のための勸進が行われ、④一三世紀前半には願蓮や証空らによって塔の建立や伽藍の造営が実現し、⑤一三世紀後半には院より高安庄が寄進され寺院の整備がされる、という過程をたどることができかと思う。叡福寺の創建年代としては③から④の時期を想定したい。また、叡福寺造営に関わる事業が、四天王寺、慈円、重源、願蓮、証空らに継承されていることから、造営主体を彼ら浄土教系の僧や念仏聖に求めるのも不可能でないと思う^⑭。

とされ、伽藍など本格的な寺院の建立は一二世紀末から一三世紀前半と推定された。ただし考古学の成果から少なくとも平安後期には

瓦葺堂宇が建立されたことが判明しており、重源の活動以前に浄土系勸進僧たちの活動拠点となっていた可能性もある。

磯長寺に関しては鎌倉初期に法隆寺の学僧、顕真が著した『聖徳太子伝私記』（以下『私記』）に、

① 御廟寺 同国 名転法輪寺 或科長寺 或石河寺

② 後冷泉院御時天喜二年甲午九月在証惑聖其名忠禪。入太子御

廟幅。現不可思議作法。……為令注進勅宣申下以法隆寺三綱康

仁等令参入御廟内。即康仁奉拜見。二御棺一御棺中在頭骨鬪骸

一許。余更无者云々

③ 元久年中太子御廟寺々僧淨戒顕光構証惑入廟中盜太子御牙齒遊行于世界或売買或勸物入云々。此僧二人本当麻住僧也。後移住太子御廟。……^⑮

などの記事がある。便宜上番号を付したが、①は太子建立四十六ヶ寺の九番目としてあるもので、地名「磯長（科長）」にちなんだ寺名も普及していたことがわかる。また②、③の記事はそれぞれ廟内に「証惑」の僧が侵入したというもので、確認のため廟内の調査が行われている。②では顕真の先祖「法隆寺康仁」が調査したとあることも注目される。上野勝己氏はこれらの記事から、太子信仰が隆盛する時流の中で太子伝の記述にあわせた廟内の操作が複数回行われた、と推測されている^⑰。

さらに一三世紀に入ると西大寺系律衆の活動が目立つようになる。叡尊の自伝的著作である『金剛仏子叡尊感身学正記』の寛元四年（一二四六）条には、

同四年丙午四十六歳、二月廿六日、於太子御廟、五百二人菩薩戒、自五月八日至六月八日卅ヶ日、奉転読講最勝王經一部十卷、衆僧誓期未來際、奉祈聖朝安穩、天下泰平、為奉報国家恩徳也、為内裏最勝講、御願成就也、六月十五日、於法華寺、始行沙弥尼布薩、……¹⁸とあり、太子信仰を重視した叡尊教団の拠点となったことがわかる。

まとめると、聖徳太子御廟は『日本書紀』『延喜式』に確認できるが、廟前寺院の建立は平安後期をさかのぼらない。平安末の「太子御記文」発見に際して四天王寺の影響下で整備が行われ、一二世紀には浄土教系勧進僧の拠点となっていたと見られる。その後は叡尊らの活動により周辺の西琳寺などともに律宗化がすすみ、一三世紀以降は真言律の寺院として近世に至ったのである。¹⁹

すなわち、曼殊院本原本が成立した「延慶元年」（一二三〇八）時点での磯長寺の信仰はすでに真言律を中心としていたと推定できる。このことから磯長寺と良源信仰との積極的な関係は見いだせず、良源信仰を重視する「是害房絵」生成に関して磯長寺の存在が大きいとは言いがたいのではないか。

三、絵巻生成と良源信仰

前掲した「是害房絵」詞書における日羅房による「靈地列拳」は、高僧に打ち懲らされた是害房に対し、日本が仏神の守護する神国であると説き聞かせる長広舌の一部である。磯長寺部分には続きがあり、弘法大師の御廟参籠について述べられている。

此弘仁元年□月十五ノ夜、弘法大師此砌ニ詣シ給シニ、御廟

幅ノ内ニ光明輪アリ。光ノ中ニ弥陀ノ三尊現シテ、法花勝鬘等

ノ大乘ノ要文ヲ誦シ給ヘリ。見仏聞法ノ力ニヨリテ大師第三発

光地ヲ証給ヘリ。

これは牧野氏がすでに述べられるとおり「中世太子伝記類などに『弘法大師御記文云』として認められるもの」²⁰である。以下「顕真得業口決抄」から引いておく。

弘法大師御記文云。ノ嵯峨天皇御宇。弘仁元年。以河内国靈

処、建立道場、ト籠処之間、参詣上宮聖靈御廟。一百箇日。

第九十六日之夜半有靈蓬籠。御廟洞之内有微妙小音、誦大

般若理趣分、応声有光明。爰空海祈念此妙事、誰者所現哉。

願示レ我。応誓願。廟窟之前有光明輪。光中有微妙音。唱

曰。我是救世大悲之垂跡也。我昔於安養世界、為利益此土

衆生。捨彼安樂。來此穢土。我母后者。是本師無量寿如来之

化身垂応也。我定惠妻女者。得大勢至菩薩之垂跡也。三尊結契受生於和国。施二日域。遷化年久。擬三彼三尊之位。並三骨於一廟。忽然光中現三弥陀三尊像。有妙音。誦法花勝鬘經等大乗要文。依二見仏間法力。爰空海証得第三発光地二已了。

『口決抄』は『私記』を著した顕真の甥、俊厳が延応元年（一二三九）に顕真の口決をまとめたものとされる。なおこの内容はひろく中世太子伝に見られ、観福寺文書のひとつ『慶長五年旧記』²²にもまったく同文が確認できる。一見して『是害房絵』による抄出は明らかだが、直接の影響関係はわからない。しかし注目すべきは抄出によりいわゆる「三骨一廟」説（磯長陵に太子、后、母后の三人が合葬されているという説）が消えていることで、磯長寺が霊地のひとつとしてしか位置づけられていないとの印象を強くする。

一方、磯長寺、四天王寺、大峯金剛山、高野山に続いて「就中」と語られるのが比叡山である。

就中叡山者、拘留孫仏説法ノ場ニハ山王権現擁護ノ砌也。

是以、伝教大師阿耨多羅三藐三菩提ノ仏ニ祈給テ、鎮護国家ノ道場ヲ建立シテ、薬師霊像ヲ中堂ニ安置シ、円宗ノ仏法ヲ此山ニ弘通シ給ヘリ。

先述したように延慶年間の磯長寺は真言律の寺院だったと思われることさらに比叡山を重視する理由はない。しかし絵巻全体では良源に

対する信仰が目立ち、日羅房の「霊地列拳」をうけて是害房は「マコト二日城ノ霊験、今ハナヲ、震旦ニハ勝テ侍ヘリケリ」と称え、依之、調達ハ大権ノ示現、守屋ハ深位ノ大士也。是皆仏菩薩ノ化儀ヲ助ケムカタメニ、仮ニ悪相ヲ示ス。……何況ヤ法花円宗ノ意者、諸法実相ト説ケリ。ナニハノ事モ仏法也。魔仏一如ト談セリ。魔界即仏界ナリ。就中、仏法守護ハ、皆是折伏忿怒ノ貌ナリ。依之、今ノ慈恵大師ハ、十一面ノ化身ニシテ、慈悲眼ニ満テレトモ、円宗ノ仏法ヲ護ラムカタメニ、大天狗ニ成ラムト誓ヒ給ヘリ。サレハ遂ニハ、我等カ種類ナルヘシ。と述べる。守屋と太子の争いを皮切りに「魔仏一如」の論理を説き始めるが、ここでも「就中」と語られるのは慈恵大師（良源）なのである。前半では是害房を撃退した三高僧のひとりであった良源が、ここでは「大天狗」で「我等カ種類」という。本来魔物調伏を担ったはずの良源をして「魔王」信仰の対象とするに至った「魔仏一如」の論理が、絵巻を支える論理として表面化してくる。

良源への言及は他にも、絵巻終盤に日羅房が是害房に対して呼びかける場面に、

我等カ此道ノ主頂トナル、皆是先世修行ノ力ナリ。宿因甚タアサカラス。今ノ慈恵大師ハ、大権ノ示現也。……早く、邪見ノ妄執ヲ改テ、速ニ菩提ノ直路ニ趣キ給マヘ。

とある。詳しくは前稿で論じたが、これも賀茂川での湯治を終え「穢」をおとした是害房を「護法善神」へ転化させる「魔仏一如」の論理につながるものと捉えられる。すなわち良源信仰は絵巻の基本的構成に関わる場面露わになっているのである。

すなわち『是害房絵』表現は、太子信仰をふまえつつも良源、比叡山へ視点を集中させており、そこに磯長寺の積極的関与を見出すことは難しい。

聖徳太子御廟への信仰を中心にさまざまな宗派が連絡する「磯長寺」の名が絵巻書写の場所として記録されている意味は大きく、絵巻生成において何らかの役割を担ったことは疑えない。しかし絵巻全体から見れば磯長寺関係記事は一部にまとめて挿入されているに過ぎず、絵巻が生成の過程で取りこんだ言説のひとつと見なすのが妥当であろう。²⁶⁾

四、絵巻生成と一四世紀

絵巻に特徴的に見られる良源信仰は、一三世紀から一四世紀に入つて隆盛をきわめた。浅湫毅氏によればそれまで摺写供養が主であった良源の造像が盛んになるのが文永年間以降であり、蒙古襲来という具体的な異国の脅威に対して外敵調伏が期待されたためではないか、という。²⁷⁾

『是害房絵』の成立

これは興味深い指摘である。本来先行説話集では比叡山や真言の効験を重視していたと思われる説話をとりあげて、良源信仰を重視した絵巻と作りかえた理由も、異国の脅威を経た一四世紀初頭の時代背景をふまえると理解しやすい。ここでは一四世紀の社会背景や絵巻全体の構成をふまえつつ、詞書の読解を試みたい。

前稿では論じきれなかった問題として、巻末における歌合場面がある。日本の天狗たちが唐土へ帰る是害房を送る送別の歌合を催す場面で、以下六首が記される。

1. 煩惱ノ、ツモレル垢ヲ、ミタラキノ、キヨキナカレニ、ス、キツルカナ
2. 峯ニスム、月ヲヨコキル、ムラクモヲ、ハケシクハラウ、山アラシカナ
3. 水ヲクミ、タキ、ヲコリテ、カクハカリ、キミニツカヘテ、ナニヲカモエム
4. カライ目ヲ、ミテカユカリヲ、カ、ヌ身ハ、カモノカハラニ、タテユラソスル
5. 鴨カワノ、鵝ノユイテノ、火タキシテ、ヒハタカヌカト、セメラレソスル
6. 老ノナミニ、モロコシ船ノキヨセツ、アキツシマニテ、ウキメヲソミル

1は日羅房、2から5はその他日本の天狗の詠歌であり、6が是害房による返歌である。

1はすでに示した「魔仏一如」の論理によつて、賀茂川の湯治で「煩惱」を流した是害房に護法善神となることを勧める歌である。

「御手洗川」の名は「歌枕名寄」「賀茂」に「鴨羽河 石川蟬小河御手洗河」とある。賀茂川の禊ぎにより解脱を試みることは、治承二年（一一七八）三月一五日、賀茂別雷神社の神主重保が主催した

『別雷神歌合』に、

みたらしや清きながれにいくしたて心のあかをいかですすがん

俊恵

御手洗の清きながれにすがれて心のあかは残らざらん

資隆

というよく似た歌があり、他にも類例が多い。

2は「平ノ山ノ間是房」の詠歌である。「月」を本朝仏法に見立て、是害房の障碍を討ちはらった、という意味であろうか。是害房に蒙古襲来が重ねられているとすれば「山アラシ」は当然「神風」を想起させる。

3、4、5は詠歌の内容が詠み手を説明しているもの。3は「木コリ水クミノ天狗」、4は「維那ノ天狗」の詠歌である。3は『法華経』「提婆達多品」の「採菓汲水拾薪設食」に由来する定型表現

であり、『袋草紙』に行基詠として

法華経を我えし事は薪こり菜つみ水汲みつかへてぞえし

が載り、また『玉葉和歌集』には俊成の詠が載る。

待賢門院中納言人人にすすめて法花経廿八品歌よませ侍りける

に、提婆品、採薪及菓隨時恭敬与

薪こりみねのこのみをもとめてぞえがたきのりはききはじめけ

る 俊成

4の「維那」は湯維那、湯那とも書き、寺院で風呂の湯をわかすなどの雑用に従事した下級僧である。一三世紀当時の俗語、口語を多く含む『名語記』にも、「湯わかす人をゆいなとなづく、如何、答、維那歟、しからは維那は寺々の寺官也、かの奉行たるべきによりてゆいなといへる歟」とある。

この歌は入浴中の是害房が「ツイテニ、カユキトコロ、タテ候ハム」などと発言している画中詞をふまえた詠歌と思われ、カ音の連続が楽しい。本絵巻において詞書本文と画中詞との連関が強固であることがわかる興味深い例である。

5は「火タキノ天狗」とあり、天狗がしばしば鴉と同一視されることをふまえて湯を準備したことを詠んでいるが、あるいは「鴉の湯出」という成句があった可能性もある。

6の是害房の歌は「ナミ（波）」「船」「シマ（島）」「ウキ（浮

き」を縁語でつないでいる。和歌の伝統では「もろこし船」は遣唐使船をさし、『千五百番歌合』にも

一九五九　なくちどりそでのみなとをとひこかしもろこし舟の
よるのねざめを
定家

とあり、主に離別の悲しみを詠う例が多い。しかし6では唐土から飛来して「憂き目」を見た是害房自身を蒙古襲来の船にたとえたと思われる。是害房は詠歌にあたって「我国ノコトワサナレハ、詩賦ナントヲ、申侍ルヘケレトモ、此国ニ入ヌレハ風俗ヲ翫ヘキモノナリ」と述べ、唐土の天狗ながら漢詩ではなく和歌を作る、という。

この発言こそ異国の天狗が本朝仏法の前に降伏したことを示し、本絵巻の関心を端的にあらわしているよう。

詞書では日羅房が、日本を「神国」と呼び、「神宮皇后」(神功皇后)による高麗百濟討伐、「上宮太子」による新羅任那討伐に言及して「是皆異国ノ魔賊ヲタハラゲ本朝ノ仏法ヲ守ランカ為也」という。ここには異国の脅威に対する神国思想、護国信仰が顕著だが、内容はごく短く、中世太子伝などの影響関係は見えにくい。ここ
②

まとめ

以上、『是害房絵』の成立した一四世紀初頭の時代背景をふまえ

て、絵巻の詞書を読み解いてきた。特に曼殊院本原本の成立圏と疑われる磯長寺について、寺院の史的展開と信仰の様相を見ることで絵巻に関連がみられるかどうかを確認した。

その結果、磯長寺は一三世紀以降には真言律の寺院として勢力を持つており、磯長寺関係の記述は、流入した知識の一部との位置づけであり、絵巻全体のなかで重視されていない可能性が高くなった。従って絵巻の「作者」として磯長寺や太子信仰の場を想定することは難しいと結論づけた。

そのうえで改めて絵巻の表現を確認すると、絵巻全体では「魔仏一如」を体現する存在として良源を重視していることがわかった。さらに巻末の歌合場面の表現についても注釈的読解を試み、全体の良源信仰とあわせて、蒙古襲来を機に異国からの脅威と、それにもなつて国家意識の高まった時代背景が影響していると論じた。

実は磯長寺も叡尊による外敵調伏の祈祷がしきりに行われた場であり、磯長寺周辺での絵巻製作もその関心のなかで行われたと推測される。
③

しかし絵の女人ではない僧侶の筆とされる曼殊院本に比べ、室町期の伝本である泉屋博古本(住友家旧蔵)^④は、構図はほとんど変わらないにも関わらず明らか大和絵風の正統派である。室町の公家日記に「是害房絵」の名がしばしば見られることから、絵巻の生

成、流通には磯長寺周辺を超えた大きな場を想定できよう。

さらに後に成立した慶應義塾図書館残欠本や、梅津本（万延元年松本亀岳模写本）^⑤、慶應義塾図書館寛文十一年本などでは送別の場面^⑥で「延年舞」が催され、「歌合」による国家意識が薄い。これは一四世紀初頭の国家意識、危機意識が希薄となり、祝言性のみが継承された結果と思われる。このような近世への展開については、他日別稿を期したい。

※ 本稿は同志社国文学会二〇一一年度春季研究発表会（二〇一一年六月一九日、於同志社大学寒梅館）にて『是害房絵』の構成と成立』として発表した内容の一部です。当日は多くの先生方にご意見ご教示を賜りました、記して深謝いたします。

※ 『是害房絵』本文は梅津次郎編『新修絵巻物全集 天狗草紙・是害房絵』（角川書店、一九七八年）に拠ったが、一部を横山重、松本隆信編『室町物語大成第八』（角川書店、一九八〇年）により校定した。

注

① 拙稿『是害房絵』の基本的構成』『文化学年報』六〇（二〇一一年三月）

② 友久武文『是害房絵』の諸本』『広島女子大学研究紀要』一六（一九八一年三月）。また同『是害房絵』の歌謡——風流踊り歌の形成にかかわって——』『中世文学の形成と展開』（和泉書院、一九九六年）

③ 石川透『善界』表現考』『室町物語と古注釈』（三弥井書店、二〇〇二年。初出一九八八年）

④ 梅津次郎『是害房絵巻の変遷』『絵巻物叢考』（中央公論美術出版、一九六八年、初出『国華』一九四八年）。

⑤ 大脇潔『観福寺』石井尚豊編『聖徳太子事典』（柏書房、一九九一年）

⑥ 牧野和夫『中世聖徳太子伝と説話——律』と太子秘事・口伝・『天狗説話』——』『説話の講座3 説話の場——唱導・注釈——』（勉誠出版、一九九三年、同『太平記』巻一至巻十一周辺と太子信仰——楠木

正成の「不思議」の基底——』長谷川端編『太平記とその周辺』（新典社、一九九四年）。のち『日本中世の説話・書物のネットワーク』（和泉書院、二〇〇九年）所収。

⑦ 前掲注6、牧野『中世聖徳太子伝と説話——律』と太子秘事・口伝・『天狗説話』——』

⑧ 牧野和夫『延慶本『平家物語』の天狗とその背景』『中世の軍記物語と歴史叙述』（竹林舎、二〇一一年）

⑨ 黒板勝美校注『新訂増補国史大系 交替式・弘仁式・延喜式』（吉川弘文館、一九七二年）

⑩ 川端善明、荒木浩校注『新日本古典文学大系 古事談・続古事談』（岩波書店、二〇〇五年）

⑪ 石川一、山本一校注『和歌文学大系 拾玉集』（明治書院、二〇〇八年）

⑫ 『南無阿弥陀仏作善集』に「太子御廟安阿弥陀仏建立御堂」の一条がある。また後掲『聖徳大師伝私記』③は、元久年中に僧二人が太子墓に

侵入し遺骨の歯が盗む事件が起こった、この二人を重源が引き取り遺骨は伊賀国新大仏寺の十一面観音に納めた、という記事である。

- ⑬ 大石雅章「西大寺流律衆と西琳寺」羽曳野市史編纂委員会編『羽曳野市史』（一九九七年三月）に「さらに河内のなかでも、西琳寺・菅田八幡宮・道明寺・教興寺・太子廟（叡福寺、太子町）・真福寺（美原町）などの西大寺律宗の拠点寺院や神社が点在した羽曳野やその周辺地域は、律衆の活動が尤も頻繁に行われた所であった」とある。

- ⑭ 小野一之「聖徳太子墓の展開と叡福寺の成立」『日本史研究』三四二（一九九一年二月）

- ⑮ 鍋島隆宏「科長郷域における中世遺跡について」『太子町立竹内街道歴史資料館館報』五（平成十年度、一九九九年三月発行）、中池佐和子「叡福寺採集の宝塔文瓦について」『大阪大谷大学文化財研究』七（二〇〇七年三月）

- ⑯ 荻野伸三郎『鵜叢刊第一 古今目録抄』（鵜叢刊会、一九三二年七月）

- ⑰ 上野勝己「聖徳太子墓を巡る動きと三骨一廟の成立」『太子町立竹内街道歴史資料館館報』三（平成八年度、一九九七年三月発行）。また同「聖徳太子廟と叡福寺の歴史」大阪市立博物館『聖徳太子ゆかりの名宝』（河内三太子叡福寺・野中寺・大聖勝軍寺）（二〇〇八年四月）

- ⑱ 羽曳野市史編纂委員会編『羽曳野市史 第4巻史料編2』（一九八一年六月）

- ⑲ 中世から近世、幕末期にかけての叡福寺の動向については、西口順子「磯長太子廟とその周辺」『京都女子学園仏教文化研究所紀要』一一（一九八一年三月）、上田長生「近世社会における天皇・朝廷権威とその解体——河内国石川郡叡福寺を中心に——」『日本史研究』五七一（二〇一〇年三月）に詳しい。

- ⑳ 前掲注8、牧野「延慶本『平家物語』の天狗とその背景」

『是害房絵』の成立

- ㉑ 『大日本仏教全書 聖徳太子伝叢書』（仏書刊行会、一九七九年）

- ㉒ 『太子町立竹内街道歴史資料館調査報告集第2集 叡福寺の縁起・霊宝目録と境内古地図』（二〇〇〇年三月）に翻刻がある。解題によれば慶長五年の原本を享保五年、天保一一年に転写したもので、叡福寺創建の縁起を載せる古い資料として注目される。

- ㉓ 若林晴子「中世における慈悲大師信仰——魔のイメージを中心に——」五味文彦編『芸能の中世』（吉川弘文館、二〇〇〇年）。ほかに原田正俊『天狗草紙』にみる鎌倉時代後期の仏法「中世の禪宗と社会」（吉川弘文館、一九九八年。初出は一九九四年）も『天狗草紙』への言及から当時の良源信仰に触れる。

- ㉔ 前掲注1、拙稿「『是害房絵』の基本的構成」

- ㉕ 前掲注1の拙稿で言及したとおり、「霊地列挙」における「大峯金剛山」部分は『金剛山縁起』の影響が顕著であることを、川崎剛志氏からご教示いただいた。

- ㉖ 浅渚毅「調伏のかたちとしての元三大師像」『仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第三七冊研究発表と座談会 予言と調伏のかたち』（二〇一〇年三月）。

- ㉗ 佐藤愛弓「頭を打ち砕かれる天狗——真言僧崇海における天狗像を中心に——」韓国日本文化学会『日本文化学報』二二（二〇〇四年五月）

- ㉘ 海津一朗「神風と悪党の世紀」『講談社現代新書、一九九五年』。なお、伊藤伸江「中世和歌連歌の研究」『笠間書院、二〇〇二年』は、「玉葉和歌集」や「野守鏡」に見える危機意識に注目し、三田村雅子「記憶の中の源氏物語」（新潮社、二〇〇八年）も当時の源氏受容を蒙古襲来とからめて論じる。永仁三年成立の「野守鏡」には聖徳太子、行基、伝教大師、弘法大師、慈覚大師に続き慈恵僧正（良源）の詠歌が載る。

- ㉙ 『名語記』八（勉誠社、一九八三年）

- ③① 『今昔物語集』巻二十第三話、第十二話では天狗が正体を現すと「屎
鶏」であった、と語る。また『十二類絵』でも鶏が愛宕山の天狗の眷属
とされている。
- ③② 直接の関連は薄いですが、怪我をした鳥類が傷を癒しているのを見て温泉
を発見する、という伝説は全国に分布しており、「トビの湯」と称する
ものが大分県、青森県などにある。『日本伝説大系第一巻 北海道・北
奥羽編』（みずうみ書房、一九八五年二月）、『大分の伝説』（大分図書、
一九七四年）など。
- ③③ 太子伝における新羅侵攻説話については、松本真輔「海を渡った来目
皇子——中世太子伝における新羅侵攻譚の展開——」『日本文学』五一
（二〇〇二年二月）参照。
- ③④ 前掲注18、『羽曳野市史 第4巻史料編2』
- ③⑤ 泉屋博士古館『泉屋博士古 日本絵画』（二〇一〇年）
- ③⑥ 石川透「『是害房絵』二本解題・翻刻」『斯道文庫論集』二八（一九九
三年十二月）に翻刻が載る。
- ③⑦ 『新修日本絵巻物全集』
- ③⑧ 『室町時代物語大成第八』。「慶應義塾大学 世界のデジタル奈良絵本
データベース」(<http://dbs.hmi.keio.ac.jp/narohon/index.html>)でも
画像を見ることが出来る。